027573-001-8

特26-774

花くらべ

福田　由道／編

M44

ADJ-0366

愛慕病

●白鳩の女神

何たる美しくも亦た意味ありげな名ぞや！戀の病かある支那人が男女生殖の病を稱く命じたるなりといふ、あらず！文字の國なれば生殖器病中最も多き痲病は愛慕惱みを醫するを取りも直さず愛慕の病氣なり、愛慕の病を醫するは誰ぞ

戀の使者

なる白鳩を抱きて波に健全なる愛を附與せんとする我が愛の女神にあらずして將た何者をか求めんあらゆる痲病藥を用ひて効なき人はすぐ醫痲を用よ▲醫痲服用第一日は全身だるく二日目より心地よき通泉と共に心身爽快苦痛減退す

獨逸大醫

ウエルレル氏處方

藥價表 參拾日分貳圓五拾錢 參拾四日分金壹圓參拾錢 七日分金七拾錢 參日分金參拾五錢▲最高價藥の新式調劑たる醫痲は一週間分で急性を治しいかなる慢性も二三週の連服で全治確保すべき一讀千金の袖珍書を附す男女交接の智識は本書によつて盡さる

▲醫痲には患者の忠實なる相談相手となるべし

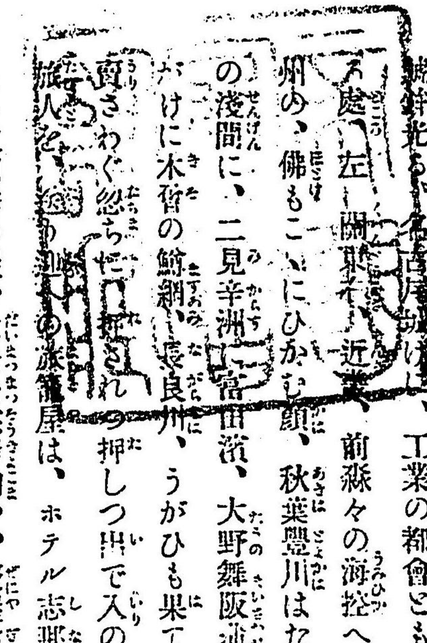
醫痲發行所　玉顏水本舗　神戸六葉堂藥房

名古屋市中區門前丁西別院前

取次は全國到る處にあり

切の節は本舗へ

料理屋宿屋總評



城鉾光る、名古屋城は、工業の都會とも、銘を打つたる中京は、あまた歴々よ

一大處、左に開聞者、近来、前滋々の海控へ、後に聞く、鐵路は、昔引かれし信州ゆ、佛もこゝにひかむ顔、秋葉豐川はた津島、伊勢の大神いふも更、夏は高根の淺間に、二見辛洲、富田濱、大野舞阪浦郡、養老瀧の落つきに、箱根出湯の出かけに木曽の鱒網、長良川、うがひも果てぬ朝まだき、名古屋千種の各驛は、物賣さわぐ忽ちに、掛されつ押しつ出で入の　札鴉のさまざま賑はしき、扨この花の旅人を、迎へる旅籠屋は、ホテル志那忠、山田屋や、百春樓に千秋樓、河正さる文四季の屋や大松松宗浦駒や、錢屋岐阜長大橋屋、近頃たてし桔梗館、うどんの功と聞こたり、書きもあげなば命毛も、禿れやすらむ數百軒、茶代やいかに多からむ、思へは浦山敷居出て、あがりさわぎのお茶屋には、河文魚半得月や、また納屋近直、御大將、向ふにながめ此方には、新進鋭の若武者や、東海樓に東

明治
44. 2. 20
内交

郊園、五月泡雪・雪月花、觀音堂を楯にとり、八千久の勢凄まじく、瀧萬梅の勇を誇し宮房一味泉竹に、小川屋川宗鳥壽も、手ぐすねひいて扣へたり、古き時代に漸しき其紛立も花やかに、月の冠りの香雪軒、物見櫓も高き東陽館、勝負いかにとなるかめたり、扨遊軍の面々は、船手　ひきゐる魚半勢、伊勢久、大森油斷なし、而して搦手は、十州樓（大曾根）西には具九、魚住樓（巾下）、花の牡丹（亭）は東方、泉に花月、小扇樓、大路間近く構へたり、大觀亭は陣取の、廣きに法螺を吹きたて、、意氣公園の天を衝き、多勢をこゝに待あらし　風にひらめく旗印、見れば、日勝勝利改良亭、金勝亭に精養軒、日曜軒の各黨を、尻目にかくる大將は、ばかき飯（廣小路）東ずし、桔梗兼こそ眞由勢、ゆく先々に彰武者のうどんとひゞく張拔きの、筒をならべて扣へたり、さて洋式の調練に、銀のさしものきらめく借樂亭と知られたり、其他三階一二階こゝへと招く旗すゞき、尾花にあらで女郎花、男へしをは待うけて、ポチをば萩の花武者は、かくともつきじ、富田なる、燒蛤は公園の、辻の電車になりひゞき、又醉醒の口なほし、寢乱れ髮の小猫をば

こゝにもまつか汁子店、上は長者の菊花亭、下は半僧坊の脇、元公園の風月や、こゝは甘黨辛黨も、喉ならしてゞ進みゆく、世は開明の有難さ、枕もなくてぬる床の、間數も繁き待合は、そこの閑所にこゝのうら、ひるはふる猫夜は小猫、ぶぶとみゐてすぐかへる、軒にかけたる行燈は、電氣きゐても尙殘る、朝寢の程ゞ豐かなるげに、色でもつ名古屋市や

十連妓のぞき提灯

○朝　日　連

兎角煙草は敷島や、大和にゆづる其ほまれ、勘定づくの　ハイカラは、わにサツクにも尙旭日、一本すうて試やしやんせ、た安い處に味がある、「一區壹錢のこゝの電車より、私しや都の電車すき、たつた五錢でどこまでも」七軒村といはれたは、疾うの昔の又昔、客は青熟赤ひきの、やがて私を小石丸、こがひの頃に色氣づき富澤町のまへる抹を、初　淺田家にひきつけて、今宵もこゝに松島屋、いふこと

、喜久家、な顔みせて、まる家の高を掘るまで、紀伊の國や、な聲たて、逃げてまはるも御座の興、大分のうけて北松島と、見て取つたらば、月の家の、手當いくらと、山田家の、大和心をふりたこし、柄がなくとも山椒の、ヒリ、こたへた昔より、待合仕込すれてゐる何の紀の正にげせまう、新若葉屋ののれんでも、年はふるこの、たもちやです、鳥羽屋鳥羽屋と、廊下をばゆ、きしするのは出歯龜が、玉家にぎるかにぎらぬか、こゝろ境の井筒家を、千代助足をふみはづし、ツル〳〵つる子と、つるべ繩、つたはぶ指も顔すらむ、まだ若葉屋、の年でなし、こゝらで廢業るは、英屋、げに仕江家のよろしくて、鮒に泥鰌に大餘こひの本場の池田家に、ひきどめらるゝこの、世喜彌、中間きの辨慶は、又も旦那のた腰越、寄附帳より勸進帳、筆太々の金嵩も、線香よりの御賽錢、伊勢のせきやの地藏より、よに音高き恒利や、新池田家の長三も、獨立自營の瓜彈きに千種百種のた炙より、きゝもよろしき三味の手や足のさはりも何となう、其の、きぬやぐぞしぬばるゝ、繼もいろはの手習は、英駒屋にも、すみつけて、ひくもやさしき小糸かな、鈴中村のさやさやと、河田家花家吉菊家、今ついそこで、太田家の、レコもこよひはうなづかむ、こけなばうたむ花菱屋、支店もつのは英家いろは、山田家花多し、あたら玉木の瑞枝をば、沈めたりけり精進川、年たつけふの山旭、ままごで丹羽家清むらむ、松の家梅家、飾りたく、今一本は富士本の半哉とよべと勝川の一夜しのべば、若淺田、ちさきの書はよまねども、少しはかじるABC、まだ店もたぬ一力の昔思へば、和泉屋の、堺にあらで酒田家の、德利は重し、ひさごやの、山竹のんで夜を、明石、よしや朝日屋のぼるとも、たひるばすぎて夕方に、成駒屋でもかへしやせぬ、よし山よし野小川屋と、涎たらして、算盤の、井桁屋はづし、久野屋の、久々あれを呼出せと、ついでにならず電話室、女中も世話はやけるなり、た嬶ち内でやけるなり、

○盆榮連

一流茶屋の魚の棚、扣へて猫のよ盛りや、げにせん樽は二葉屋の、二つ一にも行本の、思ひやられて朝日屋の、其七色は、一色に、見ねてぞ光る、かんかんや、けふ七草の、若松家、すゞな をは

じめいろいろの、味はもち合かね合の、錢家は名代の長者町、大阪屋には、小稻あね、岡田屋、松葉、藤屋、にも、新花家には若妓すむ、今松屋には うめ の花、旭、新若、松旭、木廣屋より、柏屋に、新旭より、尾花屋に、魚旭より、若旭、話かけるも小田原や、大蔦屋には只ひとり、桔梗屋には三四人、いと、荒川のた ふく さん、信濃屋、松葉、上野屋に、新かんかんにとゞめさし、新丸屋、にぞむすび、鶴龜、

○睦　連

鐘にもしるき七ッ寺、八千久、宮房万梅に、爪音高き睦連、笹家といへば、小稻を聯想し、福旭といへば染。と思出さるるもた安からず、末廣家は扇に有がたく聞ゆ、三福田ときいてツイた隣の御坊樣も仰がるる、和泉家は泉氣とてか尙も戀しく、井桁家の小六姐さんが二三合まはつた頃乃笑ひ聲、を高島さんや谷村さんに聞かせたくなる、一菊本と、秋の家は其名のつなぎもよろしくて、清榮家に新笹家、揃ひも揃ふ、氣三字名、また吉野屋の花は櫻とかぎりなく、軒提灯に咲く花は、げに四季の屋の花と花、たまには實をもむすび連、今年はもはや七つ寺、いつか寺入すみと筆、紙の相場の狂ふほど、硯の海のひがたまで、あさるはいとゞ易けれど。まづ此邊で睦連、まづ此外は次乃卷、

○廓　連

向ふは電氣こゝは瓦斯、金銀二燭をかゞやかす、花の巷のしかけには、昔かたぎの堅造も、ついとうとうととけそめて、ポチが物言ふ愛想を、眞實切つての赤心と、心の駒のくるひわなつめてくるわといふわいなくるわというてくるわいな、まづはたゞよふ新金波、九谷燒やら銀杏泥。さしだす猪口も清水や、うらをかへせば壽の、たらす涎をふく岡の、仲居は流石大まがき、管まきのやの醉客を、た手にまるめて宮田樓、甘酒ならぬ三國屋も、一は金八金次第、げに笠木屋は和子でもつ年增は老の花助や、色氣離れし長唄に、心もいつか清々樓、かのとの亥年迎ふとて、樓の名にたふ甲子は、年あら玉の砂をまく、近眼の客は雪と見て、又豐年のきざしよと、さわぐ雀の稻本や、小たばにからげ一玉屋、げに若松の

門飾り、相變らずの　緑やや、松にもまじる柏木の、はや元日も夕ぐれて、門松月に匂ひぬる、前栽みれば梅が枝の、花ありありのめでたさを、アレ三好やと春きのに、またも金波の大まがき、金吾は札の名に高く、米八年の數に出る、きのゐは花の園町や、新三朝に　後朝の、別れを惜む旅の客、膝まくらにも枕水の、うき川竹の水くらく、誰か十用も熱からむ、こゝ東玉はうかれ筋、戌年をば追うて樂々と、ことしも結ぶ初夢や、三保の松原せなにして、見る大津繪に　旅人の腰のあたりは丸瓶の、中にからしや匂ふらむ、げに　山水も　うつし繪の、筆に一きは花やぎて、法の道場にも豊本の、武田と聞くぞありがたき、尾張名古屋に年あけて、呼ぶぞめでたき新京や、さて玉のやの夜遊は、母の胸にて福美やの、

末は美濃やの大事客、日にます月に増相生、山田や路次は狭けれど、いつか手廣く四村やの、末廣やをば見たまへと、いと花村や高々とのびてまつのは鶴日や、か、一二三の　三きのゐ、又夢のやの　嬉しくて、花のや喜月桔梗やに、壽巳やの妓らの手をひいてくるは、福のや福の神、福萬歳を唱へつゝ、はひる丸やの指

をくるげに　相生の年なれば、二人が仲も和合樓、隣もこゝぜて新和合。三八二十四は昔、二つ重ねて四十八、た座の勤も久本や、くるわ鼠の音たてゝ、猫の遊ぞさわがしき。

○東　雲　連

三味は丑三つた座は八つ、げにいかめしき御規則を、守りかねたるよの中や、うべ一枚の紙にすら、うらと表はある習、まんざらつらいことでなし、下地は好きなり、御意ならば、よしやた金にならずとも、時これ金の線香代、消ねてのこるはハイカラの、東雲連の總見に、都役者も目をこのはす、進歩の程ぞ恐ろしき、げに世の中は進みゆく、三日見ぬまに櫻やの、中花とくに聲がはり、すつたもんだの交渉に、長夜もいつか明のやを、重ね重ねて常盤やの、かはらぬ色の若松や、井づゝに井桁三谷やの、氷も解けて櫻本にけふ顔出しの、新花や、はや中花の徒に、ゆふ丸髷は　うつりよく、アレ岡田やの誰さんと、かたもやさしき振袖は、都うつしの桔梗やか、帶さへしやんとぐのやの、客を松葉やいさきよし、新櫻や

は針や町、照りもよろしき黄金やや、こゝにも文をまつのやの、小松力松手を合し、叫へてたべと南向くいつか小春の時雨空、笹やに音を立花や かよふ豆子の玉あられ 肘鐵砲も打ならふ ねらひ外さぬ姉仕込 やがて浮名を小川や にみつわや富士や大阪や さて住よしハ若泉 きよ笹みどり鶴のやも とんで入江の巴やに妓どもは五人住田やに 玉二をはじめ三四人 まだ支那のやハとらねどもこゝはとなりの新日本 都は江戸や築らくや こゝろも高砂福ますや げにみなとやも勇みつゝ 平のや中や久のやに 四季のやさ〳〵げしきよき 末中村に高遠の氣もすが〳〵と東雲のあかりゆくこそめでたけれ。

○金城連

伊勢は津でもつ津は伊勢の 盛りも神都と四日市 城でもつてふ名古やすら いつか本位を色とさけ 藝者稼ぎの暖簾にも 金城連ぞ勇ましき 金城連ぐいかめしき 金のとりでに矢をうけて 敵に兵粮なしと見ば 俄に放つ肘鐵砲 げにセンコウの多少にて 指にも光る金鵄章 左東雲右朝日 短兵急のかけひきは 何れ劣らぬ武者揃ひ まづ中村屋本支店 こゝは味方の旗頭 金中村に廣中村琴中村にしらべたる 手勢すぐつて只一騎 よんべの夢も一富士や 裾野をさして一まくり こゝぞ鍍屋と ちやらちやら子 あら屋林家 大野屋に つる田屋松葉松川屋 鰐屋は小鈴東屋は 才三三吉助六と 又時の家は次郎 太郎五郎々々戸をばあけてゆく げに金城のよざかりや 鐵壁こゝに破るらむ。

○浅遊連

井戸は辰己に藏戌亥 これぞ家相の金科玉條 こゝは名古屋のくら屋敷 四町四面に地割して またくら建てゝ なさくらな 客は更なり どらくらな 奴をもとらへたはせなば 初浅遊の心でも つい深入の堀川や 木ひく石ひく土はこぶやがては藏もたつやらむ まづ枇杷島は一の客 機屋織屋の嫌ひなく 丈はなくとも幅下の 築地をこゝに神かけて 祈りもするか みすぐかる 其信濃屋の春吉は 住む町の名に奉公の 昔偲べど姥ざくら 木曾のかけ橋かけがひのなきは大事のぬしばかり 新濱田屋の民子さん 殿御きめての御座づとめ さぞ寒か

らう　あぶりやんせ　酒井山中平ばやし　はまや中村新ばやし　新山中に新葵
葵に花當　橋本屋　松川淺田濱田屋に　高田林屋新酒井　梅本ますや　濱吹や
やれまあこれで幅下も　さて又ひろい幅下や。

○榮　連

はや曙のうすあかり　れ内の首尾もあらう程　この淺田やの別れをば　僕十年に
思ふわいやがて　喜樂な世帶持ち　添うて三谷家笹やより　御膳の給仕したいわ
ナ　又子寅や　持つならば　末廣家ともなりぬべし　今は米やの奉公人　辛抱し
てとなだむれば、こらへて三桝や出來ますや　ぼんとたゝけば番頭が　たらす涎
も三千丈　曙すぎて雀なく。

○吾　妻　連

われ一連を惣揚げて　吾妻連ともながめばや　只一口と思へども　齒にこたへた
る飯川町　無勢ながらも各連に　いざ桔梗家七小町　照天衣通　物かはと　年增
さらなり若葉やも　なべや町々京桝座　わしもた芝居松のやと　さわぐ妓どもが

愛らしき　其意氣込み勇ましき。

○熱　田　連

春は大喜の梅林　けふは休みの遊散とて　髯もボタンをかけはづし　狂へる足も
しげ本や　晴海樓と名にたへど　いらかの波のうねりより　眺めも今は富士にた
や－しみ〳〵きけば　とう〳〵と　とけて流るゝ金水に　又山丸のむしんかな
きものか何かてふてふの　刻印うちし指輪やら　僕はトンボの尻がすき　フンフ
ンサウカさうかやと　話す小聲を菊咲の　よは開明の有がたさ　年あら玉の春く
れば　げに富士島の松影に　揃ひも揃ふ福住の　こよひ月照る梅の家に　カルタ
とらむも人の妻　やけるがまゝに熱燗の　きげんも丁度城州樓　あつたあつたと
舌をまく。

靜養手品種明し

一圓にて座をとしする法　（其一）

ひらりと宿をぬけ鳥　旅のつれ〳〵呼吸ぬきに　のぞくくるわのあら格子　ふと目に止る桃の花　三月ならぬ三太の　仕切はゆめのひまなれや　なほ一仕切つぎたさば　殘るは未練　金一分　これは仲居にはなぐすり　きくはうらかべかへすよる　まつよとほざくあひ方の　言葉もきかで雲霞。

其二

電車も休む眞夜中に　こつそり宿をぬけまゐり　あては觀音　生菩薩　大引けまへの店あさり　くるわねずみの撰りさしか　まだぬりのこす片かべを　仲居のやうすひめの顏　盆中みての　掛合に　帳場もころり圓助で　はな高々と　夜もすから　雨の矢先きに雲の盾　かへりは朝湯　心地よや

二三圓を抛つ法

そろりと上る大籬　腰をきめたる腹時計　いと鷹揚に落つきて　寢酒は部屋の枕ぎは　いろも淺艸苔あられ　此料締て　一二圓　下戸黨ならば餅菓子に　敗鳥なりとふかすべし　かはすのうけに火のきゐて　ちぎるはまたのうらかべを　こゝは手輕の勘定づく　そこはぬからぬ世帶持

小大盡あそび方

名古屋の驛にきたもの丶　一瀛車後れ夕方や　用事ばゝてず　明日の事　ゐ久し振りの肩休め　儘よ〳〵とひとりごち　荷物は宿に一まくり　下女の詞を聞流し急ぐ電車も御園まで　あとは車と　ゐ定まり　ボチが物いふ　上手とは　知りつゝさほど惡からぬ　仲居女中のチャホヤに　どつかとすわる絹ふとん　内の更紗にくらべては　又一入の　尻心地やをら敗鳥　もみながら　ナニすぐかへるかへるよと口と心はうらうへの　酒がくるやら人がくる　衣する音も色めきて　四時花ちらぬ此郷は　心の塵のすて處　箒の客のより處　ゴミ取さへもまじるなり

一金　御祝儀　國　九圓　貳拾五錢　ひとりかゝ
一金　たぼ子花代　七拾五錢
一金　國中五錢　御料理御酒　九圓五拾錢　ぬし子中五錢
一金　參　國七拾五錢
一月十日　上　樣　大座樣

○時間つぶし待合の妙法

宵からねるも何となう　必さみしき旅の宿　となり座敷は二人連　寄席にゆかんも伴はなし　まゝよ待合ひやかさむ　ぐわらりとあけて　今晩は　アレめづらしい古須井さん　やつとかだなも　こちらへと　例のた春がまめまめと　火鉢もてくるた茶をだす　さてどなたをと聞かれては　野心はもたず酒のまず　手持無沙汰のまのわるさ　わざと呼ばする賣れつ妓を　彼も物座敷これもるす　しきりと電話かけたれど　あかぬも道理　くる道で　車の上の目禮に　出ぬけた者をわり好み　氣をもまするもあんまりと　近所の誰か新妓をば　呼ぶもあつさり一時間芝居の果かさわがしや　其道連れとかへりくる　これも世なれし旅鳥　あれも浮世の渡り鳥　げによの中は樣々や　げによの中ぞ面白き。

○秋波一搖漂半圓の法

のぞく格子の眞向ひに　こはそもいかにうるはしや　むらむらたこる春こゝろ名札をみれば春駒と　心の駒のすゝみゆく　拍子に袖をひく仲居　ひかるゝまゝに段梯子　のぼるもはやきはや業や　部屋やいづこと宿帳の　小者にとへばあれあそこ　仕谷よしとはゞかりの　小用もすみて妓の部屋に　すわるもまたですらく〳〵と　かくもなれたる筆たろし　三本花に一本の　ぽちを添へたる五十錢　ソレ持てゆけと追立てゝ　煙草はきらひ茶はのまぬ　くたびれたりと肘まくら　ナラたやすみと用にゆく　留守は寢巻の早替り　冬あたゝまるひまもなく　夏は汗入る　すきもなし　雨の矢先きに雲の盾　はやなれあいし言の葉に　狹霧もいつかはれ渡り　ちるは花びら木々のつゆ　た迎ひですの一こゑを　た近いうちの追從を　聞くゝにかはる原のさま　くるわ鼠の　足音も　なれてやさしき長廊下せわしく草履　つきかけて　顏をもみせずひやかしの　中をしわけて　雲霞　姿もみにずなりにけり。

◎大須觀音

東都で淺草　夜櫻祇園　大阪は例の千日前　それに劣らぬ鯱鉾の　名古屋名代の

觀音は　大須をさる、　肩摩雜沓　未來を賴む老爺よりも　繁きは花の素見客や
大慈大悲の菩薩より　ならぶ裏手の女菩薩を　見むとて急ぐ客足を　止めむとは
ざく大〳〵の　香具師こそ今宵から風に　吹飛ばされて火をば消せ　この霜枯の端
た金　寄せんとあせる活動の　其呼聲は蟬よりも　うるさからずや　寄鍋や　た
でんのかをり　プンと鼻　刺戟をすれば懷の　右手さしのべて熱燗を　いきなり
あふる二三杯　これぞ魔窟の探險旗　面は谷のくれなゐか　うらへと急ぐ春の花
一杯やつて頂戴と　深夜をあての玉こかし　財布はいつも空氣銃　肘鐵砲のなき
郷は　げに夜遊びも氣樂なり

遊廓ぞめきある記

◎吾妻町のぞき

こゝぞ名高き新堂裏　左側通行守りつゝ　まづのぞきこむ萬加樓　垂水引に染ぬ
きの　衣紋は清き五三桐　花は富貴にく狂ひ獅子　ぬひのきらきら目に映り　居
列ぶ妓どもかげとなる　など、つぶやき　かんかんや又面黑き屋號なり　髮もぬ
れ羽の龍浪は　夏より秋の全盛を　今はた職を羽衣に　ゆづりて三保の松原か
田子の浦曲のうら若き　其前髮とるゝぼにぞ　老も若きも溺りゆく　次は久本庇
髮　ハイカラ風の絕ねてなく　すべて年增の世話女房　よむは小說　あむ紹刺
にじるは艶書のかなつなぎ　林檎むき〳〵話する　下鄙たる中のかはゆげは　又
すて所買所　髮にくせあるなにがしは　勤めもさぞやよからむと　思へばあぶな
次に入る　こゝは長壽の本株か　揃ひも揃ふ十八妓　た職はいつも米太郎　鶴子
もたまにすわるなり　まづたしなべて鈴張目　小拇でまるぎ歌松は　椀白ざかり
無邪氣にて　店のさきとも憚らず　物を喰ひくひ話する　食ふる妹るとを楽みに
くるわの習ひ育ちかや　よく似た顏の幾組も　居ろは從姉妹か兄弟か　うつれば
かはる白粉の　ぬりかげんとぞ知られける　こゝは座席を取かへて　札の通りに
据らねば　わ茶ひき女郎仕合な　など、心にうなづきて　本松島にわたりゆくみ
なうす色の揃ひにて　三人且なるハイカラは　ちよと我心ひきがほに　やをら隣

にうつりけり　こゝは第二の栗本と　のれんの文字によまれたり　十有九輪の嬰
粟の花　一段高くたらびたる　樣を見流し　繁長壽　こゝは壽の別れかや　十
有餘妓のあでやかさ　はなは椿かはた桃か　福太樓にさしかゝる　雛子花山　君
富子　吾妻浦里　綾ゝ子　初花胥に咲誇り　朝妻客を送るらむ　中にひがるは艶
子とや　右に玄關左店一世づくりの身代も　姉の養子に　新石の固きのれんをゆ
づりたき　妹に分つ石星と　向ひ同士の色稼業　帳場は例のやさ　男胸に括りの
紐しめて　昔つくし、贅六を　さわぐ御客にしのぶらむ　富子といふはさこ福の
蛭子の子分にこにこと　れ職に近くすわるなり　さては向の石星に　星の數程な
らべども　昔はいろの花山や　今は喜蝶の舞ひ所　すゞしき目元月の眉　いつか
れ職の　株うけて　新妓ながらも古渡り　昔ゆかしく思はるる　また梅が枝は腕
達者　金の入歯の笑ひがほ　みてすてがたき月の瀬や　折から通ふ知人に　ひか
れてぞめく松島の　菊枝といふはれ職にて　笹島生れ小鈴目の　勤大事のれ人よ
し　操といふは手かきにて　氏ひくからぬ育ちとや　やさしき聲にほだされて

通ひもするか水野君　流しもするか涎をば黄金の井を堀ぬきて　汲めどもつき
ぬ山泉　四五人連の客ひきて　仲居ホクホク蛭子樓　新曙に目のさめて　背景ソ
ット見上ぐれば　くるひにくるふから獅子の　こなたは竹にとらのゑや　そろひ
もそろふぬひとぬひ　こゝは杉浦　あれ金華　まだみぬ方をつくさんと　新福本
に豐岡に　一と三との栗本や　曙近くなるまでも　ぞめきあるけるわれよりは
客をあげんと　仲居らが　つとむる夜の　稼ぎこそ　しのぎをけづる軍なれ　ま
だぬけたりと心づき　向ふを見れば福長壽　これも長壽の別れかや　戀の習ひの
いろはとて　これも日本の民之助　旅にすれたる膳椀屋　そつとだいたる木地は
げて　せきあげたりないろはさん　いつか千壽にいろかへて　染りも深き紫や
た供も奢る朝妻に　小綱は例の河内樓　四十男に姫はたち　それは藝者の噂にて
娼妓はたもに年增なり　旅の烏も朝妻に　其巾着をしぼらせて　小綱は例の春吉
に針金便りするとかや　それを取次ぐ中島は　又うるさしと思ふらむ　新駒さん
はれ職にて　小說好きの柳顏　仲居はいつもけゞん顏　人目はゞかる助倍は　閑

所をぬけて知らぬ顔　内へ戻れば　ねんま顔。

○大　雛　の　町　々

まづはたゞよふ新金波　家の搆へも高尚に　ちよつとつきよき大雛　たゞ何となく奇麗なり　今賣出しの勢は　藝者も揃ひ妓も揃ふ　長の年月かはりなき　た心よし野仲居さん　素人離れのせぬ所が　又もよし野と客は呼ぶ　さてたきまりの一臺も　心地よし野ど取持の　竿にかゝりて椋鳥の　暫時は羽をやすむらむしばしは夢を結ぶらむ　京女郎かとみかけたる　その綾衣は年ごろも　またさめやらぬひるねどき　さてうつくしき割合に　つかぬはなせか人の目に　高尾は色も濃くうすく　年よりわかく品もよく　見ねてすんやり　献上の　ひつかけ帶のうしろかげ　いふにいはれぬ姿とや　口かずなくてつとめよく　ねたがる癖のなりなば　僕は女房にするわいと　揚屋で客ののろけ言一座はどつと笑聲　さて枕水に來てみれば　鐵の柵石の門　町は若松あら普請　こゝ搦手は花園に　意氣な入口しつらひて　和洋二風の粋客を迎ひの　拵へは　昔ながらの家憲とや

勤め大事の仕入には　客足つなぐ妙を待て　まだ初菊の　れ客さへ　羽二重肌のさはりよく　其控へ氣の大柄に　小説ずきの夜話にいと面白く明すらむ　山田生の年增にて　紅葉といふは内氣もの　今は里方ぬくけれど　この泥水に入る頃の昔語りは涙なり　男に惚るゝ質なれば　男もはまる事のあり　過ぎしふる事しらぶれば　王朝風乃官人に　思ひ思はれこくうすく　噂もぱつと立田川　今は流れて影もなし　さては行儀もすなほにて　客うけよきゞ錦なる　これは藝者乃小柄者　田舍廻りに身を固め　中京でとかす雪乃肌酉の冬よりかつ子とや　みつ子のちゑは百とやら　姉がひらいた菊宮巳　其年ごろはもゝ割の　かはゆき姿　チヨコ〳〵と　座敷さはりの手傳に　曳手あまたが虫の種　浮氣稼業を志願して　はや十年のきふけふ　まだ治らぬか惚れ病　市長を知らぬ者あれど　福岡知らぬ客はなし　馬子の唄さへかすかなる　東海道は鳴海驛　絞りも染めた　鹽なめた昔は夢の夢なれや　今は此家の　大旦那廓の締り取締り　啼く子もだまり妓もだまる　地頭もあごで指圖顔　長い方なら持て來い拗子　一に殿待二に求馬　三宰

相といふやうな　昔ゆかしの　源氏名に　年増揃ひは此家乃　しきたりとかや
面白し數ある　藝妓の其中に　腕の達者は照子さん　無邪氣なれ方は小蘭さん
小玉が腹のいさかひで　話がドット持上り　神職つれて宮田樓　普請はすべて檜
材　名にふさはしき館かな　そろへる妓らのみなりより　落つき拂ふ仲居まで
旅大盡のどぎもぬく　土産話の大こがき　ゆかりもふかき紫に　之はなにがし中
條に　花の梅園月は照る何れ劣らぬ梅櫻　桃の風味は人ぞ知る　こゝは梅本かを
りづめ　其別莊は鍛治屋町　説教場は豐本に　まけず劣らず七つ寺　なにがし
生花の家元と　菊に南天梅もどき　ばらんばらんの音たてゝ　手ほどきするぞし
ほらしき　こゝの定めは六時間　仕切遊びの臺付と　ありし昔の形式　かへて
今は世間の例ときく　筆の走りも鮮かに　折々箸の包みにも　あらはれたりし壽
は　廓名代の五階樓　燒け失せたりし其後　いと六かしき御規則に　築〳〵三階
堅普請　昔にかわる贅澤も　時代思汐の向上か　こゝぞ勝氣の發憤か　五大籬の
其一と　東海一の重鎮と　こゝにも光る金波樓　黄金の鯱の廓にてオーソリチー
と昔より　其名も高き山城屋　金吾といへば浪波より　東の粋も聞つたへ　中京
一の名妓よと　歎へやすらんさてもさても　仲居小者のはしたまで　數へ來らば
大勢の　客を一度にひきうけて藝妓はあちら　妓はこちら　た酒はた酒閨はねや
取乱さぬぞ大まがき　立嬢がぬぞ大こがき　花紫の一本は　紫匂ふ武藏野の　昔
を偲び　江戸前の　きまへよろしと　橘の　かをりにちなむ石近ひめ　肉付よく
て色白く　愛嬌あつて大人しく　たふとき客乃座にいでゝ　わるびれせぬぞ　か
んばしき　いざねざけをと　小女郎が　のりもよろしき圓盆に　小皿は刺身　の
ぞき猪口

うすむらさきぞうつりよき

仲居女がさしみのまゝにちよくときて

うすむらさきの味はわすれず

浙三朝を見にぐれば　ぬしは顔利き　肝高き　帳場は手書き愛想よき　仲居紋付妓
も多き　中にも伊勢の生れにて　別れかねたるきぬぎぬは　親の借金身にうけて

たぼこながらも正直に　勤はかたき秀調子　濱田生れの仲居にも　げに捨てがたきふしのあり　聲もよろしき猫のかげ　見るは入江乃早菊　株もよろしき大間垣花園くゞり豐本に　ぬしは武田か上杉か　植込きよき日の出町　別莊よりも說教の　ふし面白き道場や　隨喜の涙垂らすまで　くりし涎乃其數は　珠數の實よりも多からむ　さて本業は藝娼妓　こゝに笑顏の東洋は　起請も固き石藥師　金華の庭に留守あけて　ゆく末永に保養中　取られたりけり鯉節を　オノレ小猫と思へども　詮なきことゝ諦めて　鞍がへしたは大羅　昔にかはる全盛も　なんと庄野の小半時　のうけにふかす山田屋の　國子は憂さを忘れ草　ふと海軍の小林に見込はありと横須賀も　いすかの嘴と喰違ふ　此方は船の徒然に　寄越しはすれど徒に　ふみは雨夜の靴拭きになるとしらずや正妻のいつか定りて常備艦　さて東洋の墨走り　遊女に惜しき葦の跡　硯の海の干潟まで　書き盡さぬぞ花ならむ　さて蓬萊屋新岐阜屋　珊瑚かけたる妓共あり　山人めける年增あり　昔乍らの燈火に　佛念ずる妓らもあり　いづれ劣らぬ樓と樓　こゝは美濃長大掃除　障子の紙をめくるあり　提灯拂ふ仲居あり　琉球藝者の其むかし　さわぎたてたるなにがしは　今はいづこの花とさく　狹き戸口の和親樓　妓共の行儀よろしくて　雛人形とあやまたる　はや梅干の仲居にも　昔宿せし鶯の　やさしき聲ぞしぬばしき　こゝのならびの東雲に　花は小金井在原の　業平ならで池月の　のり心地よき駒もあり　露滴らむ杉山は　木立もふりてよからむと　思ふ矢先へ妓夫太郎遊びすゝむる　快辯と　其達才は　女子よりも　いと淡くして面白く　幾戰場を往來して　千草百草の　戰功に　行灯部屋のやいとより　將放蕩の大學を　すまされたりとよまれたる　道人管の材料を　アベコベに　探されたるぞ　たもしろき　同じならびの初夢は　ふじのさぐりにたどろきて　能ある鷹の爪かくし　わがなすわざを妨と　みしばいつかの夢路にて　伊勢で小浪とよびたりし　其妓は今もこゝなるかとはむとすればこれもゆめ　又國本に一力に　西は公番門に木々あそぶれ客はふじめにて　妓ごもも勤安からむ　思へば人の性は善　こつそりこゝに流連の　涎流るゝ小川樓　閑所ながらも意氣な内　仲居も靜妓も靜　客も靜

にのぞきこむ　格子の内も花やかに　舞のさらへのありしよは　余も彌次馬の一人にて　汐汲む手つき愛らしき　彼の二つ一　何樓の　何子とさでは　聞かねどもいつか　縫上も解けつらむ　思へは浦山敷居にて　コツンと頭うたれ損　草臥まうけのへらず口　たゝきながらもぬけてゆく。

○御園筋　ひやか史

今宵の芝居よかりしと　話ながらも御園筋　向ふは宵の浮かれ人　こなたは仕切る涎れ客　かへりとゆきのすれあひは　さゝの上にも花ゑ咲く　こゝは名高き御園阪　右に松泉新松泉　笑福廼　明治軒　左橋本　両川　武藏　千鳥筋同　とみかうみ　右は仲居のうでくらべ　左は屋形　妓も新妓　御園の阪と澤山に　見下されしは　過去の事　現今はどこにも　ゆづらざる　其勢ゑ頼もしき上りたてたる左側　久子に千鳥　小浪さん　吾妻に小花末子さん　信夫に小つる五月花八千代は　花の玉椿　若鶴さんも　首のべて　まぶのくるのをまつ樣子　こゝを八木元樓といふ　隣もひめは櫻花樓　愛子に米子奴どの　秀子衣川六助どん

命子に加代子　清子さん　鈴子をならす馬方の　名にこそ似たれ三吉は　折々客をのせてゆく　武田上杉台戰の　川中島とまちがへな　政中島は妓樓なり　あれは信州こゝ新地　敵は源氏の名大將　味方はかはる出羽守　其勝敗は兎も角も一つに見ゆる古戰場　さて此家の花扇　眺めもきよき水澤の　紅葉のかげに育ちたる　種もよろしき日くるまの　いと勝氣なる一徹に　たき放ちたる線香の　高は積りて御拜領　すわるた職の全盛も　花はすがれて扇さへ　要のゆるむ折々に山田生れのハイカラが　やがてた職のあとがまと　すわりかへたる顔かたち　似通ひたりな　東さん　ふはりとあふぐ扇やに　名さへゆかしき菊里に　心の竹や語らむと身なりをみれば　花やかな　黑紋付の揃にて　いづれ劣らぬ花と花　やゝ屑のふくれたる　落つき顔の年增こそ　よしある人の胤ならめ　ゆゑある庭の種ならめ　うつる隣の森田樓　名にも似合はぬ花やかな　入口戸口　廣ければ寫しあげたる活額の　生の美人に生うつし　見くらべたれど如何にせむ　名札のなきぞもどかしき　星の別れか新星は　夜這の星もまじるらむ　妓はきら星のそ

れならで　部屋わりほしの御面相けふも　思案にくれ近く　ふみにやたけをつくすらむ　われははゝきの星なれば　たまさかあがる客としれ　こゝも重寶萬やか小町に小浪　君小光　霧島さつき辰吉さん　のこる鈴吉米吉の　影はかくれてはや仕切　いとしとのごやたれならむ　晴快樓と名にたへば　客も無念を晴すらむ姫も愉快やつくすらむ　花枝に好子たつ子　伊勢　常盤に君子要豊　何れ劣らぬあだ者のなれの　果ともみるべきは　たばこくゆらす仲居なり　もゆる盛りの年ならで　浮川竹にまたとなき　命すてたる無分別　情死のありし柴本樓　今は噂の烟なく　殘るは當世ハイカラの　命大事の女郎衆　紫花遊錦姫　小らくに江崎若菜さん　花子しよんぼり　のこる頃　はや種とりぬ　花競雪　こゝは山八　樓の名や　一八ならば　うどんやと　合點はすれど　あら格子　のぞくは罪か　そばかすの　あどもかくれて　うどん粉の　やうなおしろいべタべタと　ぬりあげたりな〇〇さん　こゝはまがりの角井筒　左近といへば誰もしる　櫻のやうなうす化粧　右近となのる客あらば　うつりもさぞやよからまし　箱よりそつと新扇

地紙を見ればきめもよく　骨はみがきの　梅に月　年あらたまのあら扇　いとめでたしと　もとのまゝ　忘れたりけり　要ぎは　もとをたゞせば麺業か　これは遊女の桔梗屋や　深き馴染の通ふ夜も　亦淺倉ののれんなり　共に靜かなとなりあひ　妓共もさほど多からず　お茶ひくよはもまれにして　ふとこの入もぬくからむ　井戸かへたるか新井筒　お職のときわにこ〳〵と　細眼ながらもゑびす顔福の神とはよまれたり　龜山詞まるだしに　小柄なればや十八九　まことはたちちの上一つ笑がほは桃か夜櫻か　たぼろげながら滴るゝ　ボッテリ者の年増にもまた　捨てがたき色香あり　いざ遊ばむか山勢と　二人連なる帽子物　つゞくれた山の勢も　はしごをならす勇み肌　ともにをかしく見わたりき　音讀すれば格子樓　訓にていはゞきのねね樓　さては表に張り店を　北は腕車の上客を　スット迎へて鼠なき　ずかさず猫もつけねらふ　張店中の太まがき　俗に夜明の闇月と仇名を取りし勉强家　よるをめあての業なれば　許すかぎりの張店は　客のためにもよかるべし　されど居る妓はいかあらむそれはむかしの噂にて　今は普通の

時次郎　表しまうて　浦里と　聞ねし子さへ　伊勢の津に　鞍がへたりと仲居い
ふ　年月へても浮ぶてふ　こゝは常盤の壽船樓　ならぶはひなの辨財天　のぞく
た客は蛭子顔　帳場は宿の大黒か　毘沙門面に布袋腹　福祿壽老はみねねども
仲居はたばこ一福の　かみなであげて客まねく　げに漸しき石星の　きら〳〵し
くもみゆる内　硝子障子も小意氣にて　仲居のかほも若くみゆ　辻をばこねて
五六軒　くるわはづれし此内を　知らで過ぎゆく人多し　さては提打持ちながら
若知多樓と案内せむねるもさわぐも自由亭　話ながらも曙に　盃さすか加代子に
も　共にかはゆき妓どもにて　のこるもまづは美形なり　中島樓とひとりごち
愧しさうにながむれば　こはそもいかに屑はなし　中にも目だつ鈴張りの　其ハ
イカラぞ愛らしき　其ハイカラぞさわがざる　ならぬ浮世に泥水の　稼ぎはすれ
ど侮るな源をたゞせば小石川　清き都の生れなり　田舍育ちのうかれをが　よし
や手管をつくすとも　濁りに染まじ花蓮　心は玉の露としれ　とは開渾樓の思君
女郎をほめたる詩なり　思君肌屑つややかにして　眉目すゞしく　心亦やさし

とかや　聞くがまゝに　こゝの仲ゐに太り者ありもし其名を梅のとよぶならば吾
谷の字を奉らむず　此内すべて美人なり　知多屋　肌は少々あらけれど　顔の
よかりし小町子は　今は神戸の里ときく　のこる小芳は一二席　きりよう自慢の
ハイカラや　御園名代の千壽樓　長壽とともにはやされて　美人揃ひの張店ぞ
た職ならねど紫は　うでにたばねの五人力　へたに愚鬧をばまくならば　すぐ腰
なげをくらはせて　其座をツと引ッ外づし　たばこくゆらす大氣燄　客はひ
たひをするするたきて仲居を呼べど埒明かす　またもやけ酒二三本　きげん直し
と徇茶ひきの　臼尻かうて目をさます　テモ紫はねらい者　テモ紫はかはりもの
すごき腕とは聞ねたり　た職にたねず居りたりし　名さへゆかしき小式部はは
白粉の移がを　すゝけの木香にたきかへて　丸髷姿めしをたき　亭主に焦飯の給
仕する　しかも十有幾人の　浮妓は揃ふ桃李　福松樓は北隣　都はた職つぎ花山
向に甲子脇は辻　仲居も骨は折れるべし　光榮樓は辻の北　花も揃ひの大店や
仲居も客を引強く　妓共もまぶをさしまねく　北は新玉次は飛車今盛福の三樓

は　敷地も高き建なれど　招く線香わり安と　聞くはまことかよく賣れる　國水
樓も辻の北　客足とめ子　愛之助　まづ此邊があだつぼし　吾をばまつか　思君
樓　八千代は花の玉椿　一夜かぎりの遊君と　すてなば聞も寒からむ　急いでか
へせうらかべを　つぎはくるわの三井樓　銀行ならば金貸さむ　こゝは財布をし
め所　さわぎまはらば空財布　喜盛樓とは其隣り　喜び盛りつゞきなば　すぐう
らかへる哀みに　このみよければひめたゝず　向ふ思へば吾貧し　さて六かしき
よの中やまた面白き樓の名や　金水樓と門燈に　金を湯水につかひなば　怪しき
者と思はれむ　黄金水は大病に　功能ありとや　金水は心の塵をたとし水　つぎ
は山海　珍味より　一夜の旅の話し連　逢うた　同士の夜語りは又舊識の思あり
大仕掛なる張店に　田舎の者も目をまはす　新豐本の　煽風機　妓どもの汗をふ
かすのも　客をばあふつてだてかや　いとハイカラの助六は　うしろがまへの丈
夫さも　リボンの巾にあらはれて　みる小説によまれたり　こゝはくるわの紫雲
樓たなびくころの朝返り　冬春ことに肌寒し　障子にかすみ目に張りて　銀蠅さ
へも飛びありく　こゝ新長壽ひろい店　又も長壽の別れかや　妓どももかなり揃
ひもの　迚も長壽の比でなしと　一人がいへばさにあらず　僕はあちらをとるわ
いと　二人連なるひやかしが　話ながらにかへりゆく　こゝにまちかく津阪とて
小間物屋なる　娘子が　御きりようよしの噂もの　あれみてからは　いやになる
僕かへらうと　ふりむくを　むりにどとめて鶴の屋に　なじみの女　からかへば
一人が外に待くらし　きまりわるさの靴いちり　半皮やがて剝げつらむ　戸口の
椅子に腰かけて　仲居からかふ　樂長壽　平坂生れ壽は　きりよりもよくて肌も
よく　口數なくていやみなく　文字さへかけるたぼこもの　みてすてがたき野邊
の花　ひかば庭面に　うつさんず　さてうらうへの〇居ども　口きたなきぞ育ち
なる　既籠をみれば桔梗屋と　ふで太々のうどんやゝいきなり腹を作りつゝ　主
人をみればしり合の　だしもよろしくもりもよく　こ心　さへも　すべがりき
次紋長壽よき妓なり匂よろしき　小櫻は　花の顔月の眉妓どもの中のこどもなり
若里子に立よれば　妓どもは揃ひ　こゝとなし仲居もいとゝ落つきて　しつこか

らぬぞ花ならむ　玉にはかへと仲居いふ　こゝは玉屋の戸口なり　われ材料取と
まだしらぬ　商賣がらになき目先　みがゝば玉や光るらむ　ならぶ子供はかなり
にて戀の手ほどきする場所か　いざふでたろししめさむか　門はまなびのやかた
にも通ひにけりな　いろは樓　何とよむにや新吉古　ならぼよみよく　かゝれた
し　妓どもはかなりこゞとなし　いざ角町にうつらんず（扨納鼻虫）朝の返りは
御園筋　町わもひろく心地よし　花園町にぬけたらば　たのゞと心花やかむ

○仲居と帳場

仲居實入りもよきか身のまはり　それ者の果か意氣肌な　口善惡なくて手甲搦れ
の　すれがらしとは誰もしる　夫は何れも意氣地なし　めしたき男茶佛しの　炬
燵してまつ蛸大下　太平樂をふく長屋　喰ふにこまらぬ氣樂さは　これもこのよ
の別天地　こよひも貰多かれと　神燈かゝげてふしをがむ
帳場　しのはせなしか　一人もの　脛をかぢりし白齒者　いづれ劣らぬ履歴つき
目尻の皺に　筆走り文のてかきに讀れたり　なかゐ少しくうるさくも　妓にまは
されて　親方によく折々客にまねかれて　むなかいたまぬ酒にあき　とる臺物の
初穂にも　ほべた打たるゝ牡丹餅の　ぼちみる度に其むかし　親をなかせて兄い
じめ　湯水とすてし　黄金をば　今のこの身に　ひきかへて　思へば　吾もたぞ
かりきと　心でをがむ古里の　持佛の影やみねつらむ　折りからひゞく足音は
れ職女郎に部屋巡　さし出す品も嵩高な　のし水引の中みれば　心づくしの博多
帶　大島紬　柄もよく　いざふだんぎとれいてゆく　あら世智からきよの中に
これも帳場の役得か　仕合よしと納めたく　心の中やいかならむ

○東角町ある記

こゝはかゝり北側や　まさかり樓とよむやらむ　眞盛樓とよむやらむ　讀あげか
ねし　村長が　小首かたげて素見しの　下を潜りて岩井樓こゝも小高き　庭なれ
ば　ぞめきかねてゞみねにける　宮かとまがふ大清水　其入口の屋根もやう　玄
關先の硝子戸も　亦風變り面白く　折からのゞくひやかしも　何れの職か風變り
一くりまうて神龜樓　ならびにけりな一の字に　のゞきかねたる　片ほとり　見

捨かねたる二三人　次は和合に新和合　張店ながら大店や　黒紋付きの揃ひなる
松阪樓に富田子の　燒蛤の三つぞろひ　大花樓は中妓にて　辰甲子に妓どもな
しこゝは揚屋のはやる内　東隣はもち文の　夏は水戸洋食の　人入もよき角屋
敷　一寸すぢ向ひに七寶舍　店はさほどになけれども　くらには積むかシャコ眞
珠　花太夫　喜三郎　セキ介　玉七　小五郎　古琴　山萩など　源氏名の　かは
りもの　喜三公きざもよく　古琴ことに面白し　新山水は　はゐもよく　イロハ
白菊　花里清子　金子花山　信夫に千鳥足の蓮びにあやもあり　新桔梗屋は秋の
野か鏡に映る萩きゝやう　うつりよろしき女郎花　名も高砂の藤袴　はくはとな
りの東樓　敷島都　秀浪子　花岡小みつ一筆に　申上ぐれば　よいこなり　され
ど毛色のかはりたる　臺灣ものに　目をくれて　さわぎまはるぞいぢらしや　こ
ゝはむかしの和風樓　近頃かへし店付は　奥ゆかしくも左側　ねゐは東雲　店勝
利　加代ふた客はいろけ筋　千鳥のなくねさゐわたり　花紫ぞ色は濃き　米本樓
も　大人しき　上妓のそろひ白菊　は樓名さへも花やかな　妓は中々に　まじめ
にて　まづは霜夜の凌ぎにも　大橋樓の相之助　かとりにたもちや　濱萩は　伊
勢ならなくて　初菊の　かをりも清き　此糸の　色濃きさまが　うつくしき　ま
づこの町もはてたりと　角ののれんに居酒屋の　友をばつれて伏見阪

○富岡町きよろつ記

はや音羽座もはてたるか　あらきあらきの呼ごゑも　いとゞ高田の品定め　通り
もはてし伏見町　阪のこなたの土手燒は　串もよろしく味噌もよく　賣ゆく夜半
は四五圓の　みいりに子らも立さわぐ　月の月立十五日　職人共の休とて　日頃
旦那のチン鴨に　唾をのんだる其無念　こよひやこゝにはらすらむ　右は居酒の
山城屋　子福長者の姫三人　ちろり見上げし燗酒の　梅か櫻か月もよし　げに勅
題のそれならで　梅は日かげの後れ咲　櫻はほんの一二輪　桃はつぼみのゑまし
げに上戸更なり　鼻下長も　余いちはやく手折らんと　するか心は知らねども
こゝに財布の口あけて　無念をよそに晴すらん　久松樓は此町の　北のかゝりの
東側　た職は文子　筆たろし　くださき紙にすら〳〵と　年増ながらも　九重は

こゝのゑがほとながめたり　新龜樓に錢龜を　もたば勝子と　野心起き　新妓音羽が花櫛に　すこしはちらす紅葉葉や　心ろあらばと思ひけり　こゝ豐田樓鈴木屋やこどもは九人　張店の　何れ劣らぬ軒隣り　又壁隣泥水の　稼ぎはすれど清洲樓　若きはつる子　又文子　弘子といふは金齒にて　ゑがほもやがて金とは　る　くるわ稼ぎ方面白き　夜はふけたれど旭樓　あがらば客もがやつかむ　神風樓は伊勢人が　ならぶ子どもは五六人　文子といふぞ面白き　店にかけたる姿見の奥ゆかしくぞ見ゆる内　こゝは第二の清洲城　白菊力彌きさらぎは何れ劣らぬ花あられ　小泉わきて流れ行　末廣樓の絹みれば　龍虎戰ふ金襖　ぱつと照子の影きよく　久吉までも見榮にあり　こゝは絹屋かふとんやか肌のさはり中は中年增　梅若わかく　粹もきく　音もさやけき芭蕉葉の　しきせはつぎの　松川樓あづまといふは小がらなり　橘樓はかをりよく　小浦あやめの花ゑよき　枕勝樓に紫の　花にもあげて　大陽樓　高尾ときゝてはねたきし　客は○子のなじみ客のろけ話に夜を明石　心浮舟　あまへ聲　たぼこき客は遊ぶらむ　げにすてがたきふとこころの　魂さへもわすれけり　まづ大よそにすみたれば　いざや仕切らむどこかにていざや歸らむふけぬまに

〇猫飛ある記

富岡町の各樓を素見果てし西側を　御園にぬける小路あり　いと狹ければ猫飛びと　誰がつけたるか面白し　軒近ければ　しかいふかわれも軒下傳ふ猫　其猫さへも他きたれば　狐の里の穴探り　北のかゝりを美の宇とて　こゝにた職はまるぼちやの愛嬌ざかり賣れざかり　それにも似たる勝山は　瓜實ならでまる切の其片われとしられたり　したゝるゑがほこがね齒の　げにすてがたきけしきなりある人が

みのうへのこともわすれてあそふかな
けに勝山のけしき　みとれて

次は　松柏　樓なれど　異木の花をさかせつゝ　願叶ふがた職にて　花の春刷かけ出し　くはへきせるの長吉が　すひ付たばこくれさうな　まづ花やかなすまひ

なり　次を松花樓といふ　いろに秋花みつる花　まぶの色花　ひとよ花　月の花
山さむし花　よし花つけてあげずとも　一言こゑをかけしやんせ　客をまつ花
線香花　仲居は客の花をさち　小猫も椽のはなにねて　はなをならすか面白し
山水樓は南側　こゝは表かはたうらか　花園町に妓夫太郎　寫眞に客の月をばひ
き　こゝには妓ども　仲居番　うらと表てのさちふせは　ずゐ分よくも深川樓」
八人ならぶ其中に　ほしかとさがふ白菊に　すこしはのこる花の香や　うまれは
いせか宮川の　流の末ぞなみの花　こゝ千長壽　春扇　花のしづくにひもくれは
あやはとめづる　程もなく　足元かうき瓢樓　まだよひ店のことなれば　客はう
き〳〵　妓は素顔　尻すわらぬぞもどかしき　月は輝れども旭樓　茶良子もまじ
め　福千代も　いとやせがたに桃吉の　好みの程やいかあらむ　つぎは明王信者
にて　萬松樓と聞ゐたり　六七輪の其中に　花子や花の花ならむ。
以上新地の女郎屋なり　此外待合揚屋　數しれず　もはやいぬてふ年のくれ　か
き問しかねし其さゝに　なにのかのと　のゐの春の日永樓のまきの上に　ゆづり

りてたかむさらば〳〵。
熱田參りの電車道　東陽館とひゞく辻　東にみゆる藥店は　梅鹿ドラック　商會
の酒井分店化粧品　いと割安く賣る店と　愛想きよき店番に　硝子戸棚に透けに
けり

○熱田・遊廓一つゞき

宮の熱田は名にふりて　今は名古屋市南區と　くるわもいとゞあたゝかき　雲間
ながらも梅もとき　今宵新妓の新蝶々　榮勝樓の流連は　仲居帳場も榮樓　末廣
形の扇屋は　時代思潮の若旦那　城州樓に山城の　昔偲ぶか神喜樓ねるも起るも
白山亭　山田樓にも遠からぬ　松阪樓は遊びよく三水樓のこぼれ客　すかさず
こゝに福本樓　晴海樓の爪音を　聞けばゆかしき清本や　みがきたてたる玉長壽
榮ゑも宜しき　錦樓　梅が枝樓は勅題に　今宵の月やそやすらむ　菊本樓の移り
香を　のうけ混りにかゞすれば　船頭目をばしばたゝき　長夜明石の物語り　い
や豐本の雪之助　年增ながらも花とみゆ　うそと思はゞ池田樓　深雪かきわけ林

屋の中にも　猪子は清長霧さたも　山田の浦かへし　城洲樓の軒下に　たゝずむ
みれば鹿の子にて　足しげ本のた客をば　かすかにそれとまねくなり。

〔廣　小　路　の　長　目

四百餘洲の敵うけて　矢玉の露と消ね失せし。
第一軍の勇士らが。　ほまれをこゝに紀念碑の。
西は市役所　會議所に　東警察　議事堂の。
中にも高き縣廳は　門の芝生も廣々と
出で入る人は朝夕に　洋服姿　八字鬚。
これも名古屋の花ならむ　これは名古屋の花役者。
丸に井筒に藤の字の　家紋かゞやく大津町。
こゝは熱田の別れ路と　電車のひゞき藏々と。
前にはならぶ西洋館　日本(銀)に　明治(保)また日本(保)
内にはならぶ呉服店　諸雜貨ことに花やかに。
デパートメントストーアと　子供もなれて口ずさむ。
名古屋名代の古株に　時代思潮の花ひらく。
これぞ伊藤の呉服店　これぞ伊藤の守松氏
本町筋を大須へと　急ぐ腕車の左側　屋根看板の金文字に　光る胡蝶は池田屋と
貴金屬やら美術品　求むる客は誰も知る　わきて藝者は此店の　品を大事と身に
かざり　旦那のきげんとるとかや　さもこそあらめさもあらめ。

〔木　曾　の　客〕

木曾の寢覺の床出でゝ　急ぎし美濃の阪下や　げに數多きとんねるも　いつか尾
張の高藏寺　紅葉はたゞて千種驛　またも電車で二三町　警察近き紀念碑の　手
前にこそはつきにけり　みれば丸一電燈のまねくがまゝに宿とりて　まづ垢ぬと
すふろかげん　出花の心地たぐひなや　運ぶ御膳の燗壺はここにも散らす薄紅葉
唐紅の支那子とや　となりの酌の　聲きけば　心の駒も　狂ひ時　駒子とこそは
しられたり　ホロニヒきげん　そろ〳〵と　ゆめきあるきの廣小路　夜店の小杉

ひやかせば　肝もつぶるゝ高直に　鄙と都のかけちがひ　吾ふる里の道のべに拾ひ人もなきうねりすぎ　本町すぎて觀音の　こゝは大須か賑かな　門の小脇は活動の　あちらも寫眞　まかがやく　物をならべて香具師どもが　聲は繁の日ぐらしか　せみかひばりか　はた百舌鳥か　いとさわがしき門内を　まはればこゝも空氣銃　玉轉がしの　店番が　じみにハイカラ町々の　評判者とみねにけりさて新道裏常盤町　東角町　富岡町　花園町に　猫飛びと　ながめはてたるかへり路は　伏見稲園の二角をいづれによるも　氣心やさて廣小路きよろ〳〵とながめながらも寒からば　肉ひきずるも惡からじ　紀念碑東　信濃屋は　これも信濃に住あきて　昔忘れぬ更科や　そばどうどんを臺にして　天麩羅　たかめ紀洲麵　玉子豆腐に茶碗蒸　たやこ松月鳥なんば小田巻むしに天丼と　舌によろしきだし加減　ふる里語しながらも　又一二本心地よく　かへれば居間に　床明り　たぼろのまゝに　ねいりゆく。

下等社會の食物とよに定まれる麵類を上流向になさばやとありし官職ふりすてゝ

開く製麵工場は伊勢山町の神社西種村氏と聞にたりさて日々の製造は一千貫とひどきたり干場にならぶ麵類は時なら夏の糸瀧かいとすゞしくも見にけり

○夜　店　の　ぞ　記

ながめもいとゞ廣小路　右と左の西側に　ならべたてたる夜店こそいかなる物と小口より　のぞくもげにや　面白き　これは道具の古茶碗　それは書物の讀ふるし　向ふに見ゆる嵩高の　小桶にた鉢大だらひ　一聲高くさへづるは　瀬戸の刎出し夜寒燒　こなたはしやつにづぼん下　石鹸賣りは宵の間に　聲さへかれてかすかなり　あれは牛めしたでんやや　これはどてやきうづらやき　くびをすくめし店番が　こゝをせんどと年の市　山かとまがふ松の枝　ことしはわきて梅の枝　たまにはまじる揚柳　植込小鉢七五三飾り　うらむとこゝに夜を明かす　夜露の程もしぬばるゝ　かゝる浮世の稼ぎにも　世は共同生活の有難さ　余は筆持つすべよりも　知らで其日を過しゆく思へば高き父の恩偲べば深き母の慈悲山家育ちの身ながらも　都大路の人とすむ　問屋は多き傳馬町　物の仕入は鐵砲

町　木町筋は大店の　軒をならべて昔より　道具は主もに袋町　門前町に古渡り　杉の町には古着店　京町筋は藥屋の　一流茶屋は魚の棚　七間町は三味線の音にもしるき猫の巣や。

○劇場と其最寄

舊式ながら末廣座　客筋よくて人氣よく　大入占めて木戸口は　いふも更なり　た茶屋より　東西振れの　裁付袴まで　流石枯れても木町の　旦那はかくと知られたり　この小屋木戸の割安く　先得すれば三等も　二等にまさる見場ありと　小供連れたるうら棚の　たかゝもすしを　かぶりつゝ　都役者をはやすなり　御園の小屋も此式に　倣はゞ　たゞにず小屋開かむ　さて音羽座は　伏見町　年中休　むことはなし　座頭荒木清とて　新俳優の成功者　其立まはりはしこくて　いきた姿ぞよくうつる　やんややんやの褒聲に　娘も後家も口あきて　よだれは溪の　岩清水　小草やためにぬるゝらむ宮房ためにうるはしむ　こゝは中店　魚の棚　又七ッ寺上下の　宮房とこそ聞ゐたれ　料理もうまくた座もよく　酌婦もいとゞ　うるはしき　こゝ宮房北東　半丁ばかり入江町　其通り名も鳥辰の　主は大脇つま小から　かしはゝ安くかさ多し　さてはあら骨山をなし　待てるた客は雲をなす　これに隣れる藝者屋の　妓共はなべて美人とや　提打見れば永樂屋　樂永きものとしれもとにもどりて御園座の　構へは高く中廣く　中京一の劇場と　都のそらになり渡る　一利一害木戸錢の　あまり高くて中芝居　うたれぬまゝに中以下の得意にがすゞいとをしき　芝居のはてのかへさにも　よるはそば屋の東京庵　げにうるはしき　細君は家の賓やぬしの得　そばもうどんも　よきだしにだされて　通ふ出齒黨の　まねく藝者はよし山や　すゑの子金糸と數多しすゑ子は小拇利巧者　愛嬌よくて藝もあり　丈今少し高からば　齒が今少し摘ひなば　中京一の名妓とも　余はほめなむ　さて小川屋は其となり　愛想よしと聞ゐたり　東京庵の門前に　あるは美濃忠　小料理のいと割安き内なれば　客の出入も數しげしさて　千歳座は廣小路　少し下りし桑名町　これ亦はやる小屋なれば　芝居かゝらぬ日も少し　小屋のならびに　ある鮓は　中京一の味と　となりの人は舌

ならす　こゝより近き　廣小路　木家東の鮒もよし　料理を出せど御手ならば
忽ちまゐる味加減　思へばわれも喉はなる　少し南へ入江町　藝者置屋の巴屋に
乘太久吉外三人　たといふがをりしかど　今はいづこの花やらむ　巴といふが
居りし時　部屋のもめたる事もあり　乘太といふは大柄の　た心よしの　年増者
山田家支店初夢に　いくたの客やどりつらん　思へば年も久吉や　たでこながら
もかわゆげの　あれば線香よくうれて　たゞまゐりするぞありがたき　たゞたばの
名をかる〳〵と　客に話すぞあかぬなる　馬方ならで三吉は　小形の美人捨てが
たし　昔なれたるあら馬を　捨てんとしたる白川に　夜舟の夢もさむるほど　し
たゝか耳をはねられき　さては鼓膜の破れかと　醫者にはしるもいちはやく　汗
も流れてゆく水の　馬耳東風にかすがひの　きゝめは更に梨の園　弟子のわざと
ながめたり　こゝのならびの東菊　閑所なればやはやる　囘ふは蜜蜂　あそぶ
は小猫　年ふる猫も音たてゝ　鮮飾しがむ　折もあり　廓育ちの大黑は　たやじを
しのぐきりまわし　戌の春にはふどんより　座敷火鉢の數々を　求めたりとは感

心な　ことしの春の買物は　何々ならむ聞かまはし　このまた東住田屋の　姉の
小つやはやひきて　巾下仕居茶に花に俄仕込の影の妻　亭主ははれてよにも出
し　某旅館の大將と　日本のみかは隣まで　周く人の知る處　王二といふは妹に
て　都で三味をならしたる　年よりふけし手拍者　足も達者の口まつや　日本
のみかは支那にまで　ひゞき渡れる筑前の　琵琶の藝者と共々に　旅行もすべき
意氣込や　花櫻木は其東づゝと閑所の奥ふかく　王朝風の官人を　すませてもよ
き待合や　いと子無心の質なれば　猫の出入もしげくして　眞夜中頃の賑ひは
浮世鼠の巣原かや　猫のさわぎも高々と　さて住田家の其前を　横三藏にぬけ閑
所　待合置屋數多し　昔思へば黑がこひ　一色長者の小雀が炭をくはへて巣をか
まへ　寐込を人にかき出され　再びもとも朝すゞめ　再び出でゝ伏見町　焦す飯
にもはやあきて　餓れぬための梅代とて　廓名代の新金波　すむ冥月に照らむと
は　三井の社のさ迷ひに　もゆる思の旦夕に　昔のさまや偲ぶらむ　さてもをど
りの名妓ぞと　もてはやさるぞ有難や　こゝは入江の料理屋や　五月とよべど寒

月も　人氣に霜のはやきにて　朝よりさわぐ三味の音出前の男すたすたと　荷ふは料理仕のかご　何處に會や燈かるゝ　庭木へだてし離れ屋に　聞ゆるこゑもと切れとぎれ　げによ話によいところ　こゝにはさわぐ大勢連れ　社宮はしたふ貫一に　客も十八番やつくすらむ　庭にはかへる一連の　姫をとらへて管をまく門にはならぶ車ひき　馬鹿野郎ともいひた顔　待遠しくもみわにけり　こゝの支店は廣小路　八百屋町なる角屋敷　料理かた〳〵生魚もうる五月にまけず劣らじと　勉強するは泡雪や　冬の雪とも積りゆく　利益の程は浦山し　四五町西に東海樓まだ新らしき軒構へ　庭木に苔はむさねども　つけし其名の廣々と　太平洋の客うけて　出船入船たゑまなく　はやくれむつの音ともに　出羽の旅人もよるならむ　いとさわがしく聞にけり　あんまんぢうに音高き　納屋橋詰の南寄　門に荷馬車の塵たてど　うらは面する　堀川や　帆かけ檣樯のながめよく　天王崎の町のうら　吻干竿にゑもいへぬ　むつきふる衣のかゝらずば　いとよからむと思ふのみ　夏はすゞしく冬もよく　變らぬ味の瓜漬は　奈良のそれにもなほまさり普く人の知るところ　料理は良くて席もよく　器もよくて取次ぎの　女の樣子やさしくて　氣慨もみゆる桑名子の　交るとこそは知られたり　あまた貴賓のよる中に　尾西の素封文吾子が　をり〳〵こゝにうたげして　漢詩の作もありしとかや　其近什を聞きしかど　隣り座敷の爪彈きに　ふと轉句をばもらしたり歸はこゝの奈良漬と　橋の際なるまんぢうを　家づとにして廣小路　ぶら〳〵くるぞ面白き　いざまたしばし藝子屋の　提灯もたむ　ぶら〳〵と　宴會戻り廣小路郵便局の軒傳ひ住吉町の東側　江戸屋のぬしは鬼頭ゑい　聲もやさしくかほもよく　一人子持のふけやらぬ　まことはたちの上五つ　後家にはあらで御主人は御園の阪の東側　床金深とつたへきく　こゝ四五年は得つゞき　うれもよろしと知られたり　朝鮮妓生の住む館も　こゝより近き廣小路　江戸屋の南若泉　同じたぐひの藝者屋や　人をあやなす妙をゑて　口さばきよき御新さんは　但それしやのはてかなど　そしらばひどくれ目出玉の　飛び出むばかり打ちたるか　眉間に疵の太郎さん　後をみせぬ的證と　ながめば　いとゞ手拭者　ひく三線味は聞

かねども　太郎々々と招かるゝ　曰く因縁故事來も　ちと來たまへと次の卷　十人好きの君子さん福々面の福の顔　豐年秋に生れたか　すきなお客の話には　たらす涎も　三千丈　曳く手も多き事なれば　いちはやきより順々に　まゐり申さむ　たそならば　泊めてたべといひた顔　豆八さんははとに似てとまるも木々の橘や　小島が崎の合戰に　武遊の程はつたへきく　こゝは山田屋支店にて　ぼたんといふは年増なり　たけはなけれどことの葉も　花も　玉堂富貴とて　悟空堂連のはやしもの　（花のボタンに屬魂ほれていつも財布はからの獅子）

ぬつとのびたる小綱さん　牛をつなぐか馬ひくか　馬苦勞さんか御苦勞に　ひくや手綱のゆるみがち　お腹もすかば洋食の　三皿は僕もたごりてむ　こゝは呉服の花菱屋　店はじめての新顔も　ぬしが捨てたる黄白の　追々内に戻りくる　樣子と聞くぞ頼もしき　妓共ぞろひの置屋なり　蒲焼町のつゞきにて　ソレソレソコノ園井町　力彌といふは朝日屋の　大慈大悲の觀世音　御油藏森や弘法の　寄進さらなり三味線の腕の達者と雀班の　お顔は舞のさらへにて　何れも方の知る

ところ　こゝの小秀の姐さんは　妹つれて花かせぎ　子どもはどこにいてある　くわしいことはしらねども　仇花ならぬ○○○○○　觀音うらの小屋前に　ゐるはずゐ分よい妹　袖をひかむもさすがにて　空氣銃より肘鐵砲　一抔やつて頂戴と聞くまでまたうほとゝぎす　なく橘のそれならで　蜜柑面なる花子さん　昔はかたき　石山の今はくだけてゴロゴロと　桑名の頃や　花ならむ　新池田屋の長三さん　人は兎や角ういふけれど　僕はあなたを名古屋一　日本一とほめませう　今は盛りの花の春　世をはばからず飛びあるき　悲觀をせずに樂觀の　のんきのんきにくらされよ　僕またいつもぶらぶらと　提灯さげて振れゆかん　本重町と聞くばかり　庭も廣うて月も照る　梅の木ないがたあいにく　げに勅題にもれさうな　待合一つありとせむ　この待合けしからぬ　預けて置た　釣り錢を　とりにやつたら出しやがらぬ　ハヨきて費へ二割引　何の蚊んのと強慾の　魂性はつけによまれたり　まづさはらねばたゝりなし　以來寄らねば損もなし　ひしだとあぶらしぼりたく　こゝ廣小路本町と　七間町の其あはひ　鯛めし館といふ内は

たやぢは犬の奇麗好　はゞかりみても床の間と　間違さうなよいざしき　料理も
よくて　庭もよし　少し高いと思へども　雑巾代とくらべては　まづはた安い方
ならむ　一町ばかり筋向に　泉といへるた茶屋あり　女將は後家の身ながらも
盛りかへしたる腕達者　舞もよろしき松の家の　叶子　鼠負と聞たり　叶子は目
玉鈴張りの　先天的の美者やと　た里を聞けば又げい者　氏になぞらふ其家の
たかみはむこをとるとかや　入聟したき心地せり　はるかにとんで睦連　みよし
屋みさ子　利巧者　伊勢の艫戸に旅稼　魚一番のかつぶしを　くはへて歸るさか
し猫　たんすに火鉢てつびんの　思ひ半ばに過ぎやせむ　姉の某如何にせし　聞
かまほしさのかぎりなや　さて井桁屋の小六さん　蜂須賀ならで矢張また　い
と著まめな方々を　向ふに張つてグットのみ　政ちやんだいた其うでゞ　とつて
なげるか　にらい方　いつか御園の阪筋を　管まきながら　旦つくと　二挺車を
ちらとみた　落つく先は九州相良　これは伊賀越道中合羽　こゝは筑前いや薩摩
琵琶の名手とひゞきたる　太名種の高助子　小兄は至つて眞面目ものまたふくろ

年も古着もの　あまり三味線もたずして　線香うるに上手なり　御園通りに住吉
に別院脇に月見町　日の出の宮にどこまでも　ついてまはるは福連の　あやかり
たさかいとせめて　僕唐棧の袷ほし　出ものあつたら聞いてんか　子ーかあさん
にコレたたねさん
七ッ寺なる門の前　米屋といへば誰もしる　瀬戸の米屋の支店なり　間數もひろ
き　角屋敷　本町近く大洲へも　只一足の便利なり　賄よくて部屋もよく　若子
ぞろひの飯盛に　たのづと腹もふくらかむ　思へばさすが米屋なり
時計買はんと本町を　ぶら〳〵上る東側　野々部の文字に目のうつり　求めて見
れば割安く　機械丈夫の時計なり　いとハイカラの店付や
老舗もふるき元祿の　昔聞きし其日より　八幡の神の御使ひの　其白鳥もうつり
よき　日の出印の　勢は　西別院の向側　小西と名のる藥店白鳥いだく　秘女神
の印は齊藤　道德のすたれし世にも　たゞかねし癩病根治の新奇藥　ぬしは神戸
の利兵術とて　議長代理の公議に　其名も高き紳士なり

西別院の左脇　七つ寺なる萬梅は　料理もよくて閑かなる　四疊半には爪彈きの
これは睦の藝子ども　客は店もつ有福の　心の塵の拂ひ處　いなまんぢうの元祖
とて　食道樂の評判もの　今の廣間のたゝざりし　昔は酒の銚子よく　沸ぎ加減
をとれ燗番のぞく　障子の小窓より　客は上戸の舌皷　うつはとなりにた手の音
聞くよりはやく出す銚子　よろしそろひの呑屋なり　こゝより近き歌舞伎座の
前にならべる藝者屋は　これぞ即睦連　耳鼻咽喉の岩田氏はいとハイカラの　は
やり醫者　元公園の其あとにあるは八千久の料理店　こゝた手輕の料理向　た氣
にめしてか　町人は　いふも更なり　近在の　老若ともに　春秋の　彼岸はこと
に觀音の　利益多しときくの花　酌婦もなべてうるはしや　こゝは夜舟かしら河
の小供の　寢顏妻の呼吸　こつそり出て　ぬけまゐり　三本揚げたかへり道　素
知らぬ顏のはんべいや　二品三品よせなべの　酒は白鹿子の日松　はやぎゝする
は鬼ころび　下戸はさくらの井に　したゝか腹やつくるらむ　こゝは燒鳥ひよす
ゞめ　つぐみはわきて香ばしき　八九錢より三四錢　この肴にて正宗を　グッと
ひきかけ　木町をそろ々々ゆけば夜さはりが　チョン々ならす柏子木に　ふし面
白き唄も出む
こゝは高等演舞場　日の出町とて日の出館　最新式の建前に　うなる小聲の反響
もげに面白く聞ゆらむ　こゝ演說によいところ　道人亦こゝに破れ鐘の　いと聲
高にのべたりき　新地も近く湯も近し　さて豐本の溫泉は　日の出館より程近く
脫表場もひろき混堂なれば　客の出入足繁し　雜誌や新聞の備へあり　みるく汁
粉の　口ざはり　げに小半日の皺のばし　新地戻りの清めには　とりわけ都合よ
かるべし　町は白川　中常盤　こゝは待合　客足も　藝子も出入いと繁く　門口
せまく　溷川の　流れもはやき　雨の夜の　車の向のかへり路は　思ひやられて
氣の毒な
さて一力ほ千歲座の南一町　西側の閑所の中の待合ぞ　町わにまれな廣庭を　北
と南の兩側に　ひかへて席も靜なり　ぬしは粟出のちよ子さん　花の蕾のたま子
さん　のこる一人は神風の　伊勢の川崎生れとや　料理といへばすぐに出る　藝

子といへばすぐにくる　至極便利な遊び場や本重町の新守座これもずゐ分よき小屋と　人にしられし　賓生座　大須の横とひゞきたり　其他の小屋に寄席小屋をよせて二三十ありと知れ　尚くはしきは次の巻

○電　車　行

名古屋の驛に下車すれば　雲かとまがふ人の數　これを目あての道者宿　軒をならべて客招く　中にも清き清駒や　志那忠支店桔梗兼　電車にのらば柳橋　こゝは押切　別れ路　枇杷島さして急ぎゆく　次は納屋橋　御園筋　本町こゑて　七間町　大津町より熱田ゆき　久屋東山車道　千種驛にとつきにける　熱田ゆきには矢場をへて　小林こゑて上前津　こゝ公園の別れ路　東田さしてまがりゆく　前津につゞく　不二見町　別院こゑて　專賣所　澤上高藏熱田驛　神宮こゑて傳馬町驛の前より　築港にはしる　電車もありとしれ　水族館のかよひにもすゞしくはしる電車あり

○旅　館　案　内

富澤町の大松は　其名にしるき前栽の　うゑ込廣く部屋多し　廣間に離れ茶の間より　見渡すけしき面白や　夏はすゞしく秋紅く　燈籠堆き雪の色　花とも見るは梅子より　松子竹子と湯殿より　呼べは返事もいさぎよく　ひびく電話は九百の五十三とは聞ゐたり　門は名にたふ七間の　通り出でなば廣小路　郵便局もそれそこに　停る電車は　笹しまの　客も千種の客もまた　一まづこゝに下るなり　さて大松の　其ぬしは　三河生れの鈴木氏　つかさにありし銀守りし物のわかれる御仁とや　ここは名にたふ廣小路　本町ちかき北がはに　客を松宗旅館あり　部屋は二階に三階に　一人一人にこまゞに　床に花生そなはれり　さすがはふるき宿屋とて　屆けるさまの心地よや　家すぢたかくむね高き　本町すぢの時計屋の屋根にかざれる大時計　まよ中ことに冴ゐもよく　門にぎはしく夜店たち　瀛車も電車も便利よく　電話は千の六十七　電話は千の六十七　七間町の　立花屋　入口きよく奥ふかし部屋と部屋とのきりもよく　家具賄ひの　品もよく　いと閑かなる住居とて　こちらも飛ばず庭きよし　さわぐことすらゆるさねば

たゐて妓ねこのかげもなし　くるは諸國の諸商人　まじめすなほな　たきやく筋
電話は四百一十九　電話は四百二十九　縣廳前とひと口に　紀念碑そばとわかり
よき　宿は丸井の旅館なり　料理もうまく酌もよし　暮にはかへる諸役人　朝は
みゆる其の屋かた　便利よろしき宿屋なり　ながめよろしき宿屋なり　電話は八
の九五なり　電話は八の九五なり

○花　の　色　別

櫻　さかり短く實はなく　ただうるはしの　櫻はな　やはり野にたけ蓮花艸　庭
にうゑては　榮へもなし　た彼岸ごろにさくゆゑか　たまゐり好み線香を　たき
つつもらふた賽錢　明王樣を信ずれど　加佐登の神を念ずれど　ハイカラ紫蘇
すく故か　あまり物喰よきゆゑか　梅酸の毒によく中り　脹まん病によくかかり
頭痛鉢卷する折も　辻便所のすて所なく　まゝ引受人あるときは　根ざしもかた
く尻すゑて貧乏ゆるぎせぬとかやこやしはふしと　佐渡の土　出來たその子は櫻
ん坊　父はた人もよし野山　杉にはあらで出すぎもの　行すぎものゝふしだらけ

母は仕事に吻艸の　氣もうき艸のふら〳〵と　あすはむかふの岸にさく　たまに
木性に立かへり　人の妻木と朝夕に　まゝたくすべもしら豆腐　奴豆腐にわらは
れて　がまごのへりに汗をかく　物見遊散に出るとては　紅白粉のうつりよく
深山にまじる櫻木の　花のこずゑとうしろ指　さされてゆくもひと時に　ちる花
びらは春駒の　あがきにふみもにじられむ　千株万株の中よりも　ただひと本の
廣庭に　千枝さしかはす夜櫻は彼がこの世の理想ならむ　さてはふみかく道しら
ず物ぬふすべもしらずして　うかうか夢の世の中に　松のみさをのたゐてなく
すぐなる道の杉しらで　すぎゆくさまぞあはれなる

○桃と陰梅は後の巻に讓る

夢さめて　此處も憂世と　悟る頃
空となりけり　縞の財布は　　悟空

本社　大阪市南區難波
合資會社　新田帶革製作所
電話長西七四八　西七八六

新田帶革

支店　名古屋市中區天王崎町納屋橋東詰南
名古屋出張所
電話長　三八〇番

本社　大阪市南區難波
合資會社　新田帶革製作所
電話長西七四八　西七八六

支店　名古屋市中區天王崎町納屋橋東詰南
名古屋出張所
電話長　三八一番

新田帶革

名古屋市富澤町三丁目
大松旅館
電話　九五三番

御料理
一力
名古屋市中區南桑名町二丁目西側閑所
粟田千代

りん病根治
ばい毒請合
胃腸病妙藥

（一週金壹圓廿錢 送料金八錢）
（一週壹圓以下 三十錢マデ）

右如何なる慢性疾患も忽ち全治請合の妙藥なり無効の時は返金す右は當商會專門の靈藥なれば他藥店になし直接申込來談あれ

名古屋驛前一丁東
ドラツク商會支店
名古屋市南伏見町一丁目
ドラツク商會分店

上海向
改良品
機械製
饂飩
素麺
冷麥
一日製造高壹千貫
名古屋市中區伊勢山町
種村製麺商會

金銀水晶玉石牙角木竹ゴム
進歩的附屬品各種

諸印章ゴム印彫刻は
勞力を供犧牲◉應員需

名古屋往吉町
古竹印堂房
長電わ二六三一　振替東京一一九六九

賣藥小間物
並雜貨

名古屋市中區下前津町電車通リ
元松波病院ヨリ上ヘ三軒目東側
清水商店

寶石入や純金の　指輪に時計磁石をば　つなぐ金鎖にメタル類　かう
す釦に胸ぼたん　金綠眼鏡紐の丸　金の帶留　金根掛ピンニブローチ
簪に櫛笄も何れ金　茶托湯沸盃に　煙管に裏座金具類地金銀の美術品
製作緻密新意匠　黃金の花に居る蝶の　刻印目ざに來玉へと　招くは
尾張名古屋にて鐵砲町の貳丁目や　ならす電話も十五番　へんしもは
やく池田屋と　御用命の程もよく　承りて御氣にめす　樣に拵へ申す
べし
せひ御ひいきをたまへかしと　願ふは

貴金屬美術品商

名古屋市中區鐵砲町二丁目

池田商店

主人敬白

◎百圓進呈◎

ちいん病毒　胃腸病　根治請合　藥

其他有名賣藥各種

內外　化粧品小間物類　廉價販賣

名古屋市中區矢場町電車停留所南

ドラッグ商會分店　酒井藥舗

電話三〇九九番
振替貯金口座東京一五八二〇

照會は返信料を要せず至急回答すべし

伊藤式製圖器寫圖器

製造販賣元

其他新規發明品發賣

（新案千里眼）

箱の中には球三色

一ッぬいたる　其色を

それ何色と當てみる

たもちやながらも

千里眼

名古屋市中區南武平町四丁目

伊藤商會

親切丁寧に御取扱申上候

一 旅館

名古屋市新榮町三丁目
紀念碑の東二丁半南側
電話三二二八番

燒鳥
御料理
いろく

名古屋市中區元公園前
近江屋事 きた川

土木建築設計及製圖
工事ニ關スル書類及圖面ノ謄寫
青色版寫眞ノ調製

右依賴ニ應ズ

但料金表及見本品等御入用ノ方ハ御一報次第直ニ無代送呈ス

名古屋市中區南鍛冶屋町二丁目六番地
松久事務所

常滑燒一式
販賣

名古屋市精進川筋紀念橋東詰の南
竈元 清水出張店

資本金貳拾萬圓

東京市京橋區日吉二一番地

帝國公債信託株式▲社

電話特長新橋九三六番

名古屋市南鍛冶屋町二丁目廿三番地

帝國公債信託株式◎社

名古屋出張所

登録商標 ㊐

日本唯一砂取米洗兼米揚器

（本器特色さの〻節）

手はぬれずつめたい事は尚更しらず

砂や糖も皆これて

胃病脚氣に子ーかゝらずに

炊た御飯の　味のよき

一個小五拾五錢より大二圓まで六種

名古屋市中區東陽町八丁目

日本米洗器合資◎社販賣部

特約販賣希望の方は至急申込あれ

子宮病　其他諸病
はり治療法

名古屋市中區伊勢山町
神明前
婦人小兒科　岡山鍼療院

うどん
そば
かやく物
いろく

名古屋警察前
廣小路通新榮町二丁目
信濃屋事
日下部菊太郎

四季
はまぐり
御料理
會席出前共
大勉强仕候

名古屋市上前津前
電車停留所
四日市屋支店

名古屋市南大津町
販賣部
ふとん
綿

本店　同市東區黑門町
國枝製綿所

264
716

寫眞撮影

開業披露ノ爲

當分大割引

名古屋市中區東陽町通リ
東陽館ヨリ一丁程東北側

荻野寫眞館

明治四十四年一月三十日第四種郵便物認可
名古屋市市場番屋町三丁目二十二番地
發行人　荻野久
印刷所　名古屋市市場番屋町三丁目四十六番地
印刷人　中文社
同　市岡區岡町　同　寺地
印刷者　野村早太郎
名古屋市中區東陽町三丁目三十二番地
發行所　花競會
同所　大賣捌所　山道館

廣告

桃櫻之巻

近日發行

本巻には春華の夢、咲き乱れる桜花の美しさを描出せる桃櫻、並びに、桜、藤を附録とす、御雅誌ご愛顧の上、御告知を願ひ、御注文を願かすべしと信じ、廣告の効を大なるべしと信ず。　近日出版あり

廣告料

普通欄	半頁	金四圓
	小半頁	金二圓
特別欄	半頁	金拾五圓
	小半頁	金拾圓

文中廣告一行金五拾錢

不許複製
許可　定價金拾錢

264
716

廣告

桃櫻之卷

近日發行

本號には　榮華の夢　憂き勤　と題するたもしろき新体詩及び　御門山の傳記　並びに　高嶺の説話を附録とすべく尙雜誌ホラの主意書を掲げて諸君を驚かすべければ從つて廣告の効多大なるべしと信ず乞ふ　至急申込あれ

廣告料

普通欄	一頁	金四圓
	半頁	金三圓
	小半頁	金二圓
特別欄	一頁	金拾五圓
	半頁	金拾圓
	小半頁	六圓

文中廣告一行金五拾錢

明治四十四年一月三十日印刷
明治四十四年二月三日發行
名古屋市中區新榮町三丁目三十二番地
發行兼編輯人　福田由道
名古屋市中區東陽町三丁目四十六番地
印刷所　昇文社
同　市同區同町同番地
印刷者　野村昇太郎
名古屋市中區榮町三丁目三十二番地
發行所　花競會
同所
大賣捌所　由道館

不許復製

一冊　定價金貳拾錢

名古屋市中區門前町大須角
麺類料理業　桔梗兼本店　電話四一九

同中區榮町二ノ一八
同　桔梗兼第一支店　電話四一八

かしわ料理　桔梗兼第一東店

東區富士町四丁目　電話全
麺類料理　桔梗兼第二支店　電話二六七七

中區春日町
同　桔梗兼第三支店　電話二八三六

中區元新地
同　桔梗兼第四支店　電話一九六六

南區熱田神戸町
料理　桔梗兼第六支店　電話七八四

名古屋南區熱田神宮
御手軽料理　桔梗兼第九支店

中區笹島驛前
旅館　桔梗兼第十支店　電話一九九四

中區公園前
麺類料理　桔梗兼第十一支店

南區熱田神社東門
めん類料理　桔梗兼第十二支店　電話

南區熱田神戸町
同　桔梗兼第十三支店

16 4